

# I 創立100周年からのあゆみ



## 創立125周年記念誌の編纂にあたって

編纂事業委員長 森 本 武 利

1972年（昭和47年）11月3日に創立百周年記念祝典が盛大に開催されてから25年を数える。この間の大学の歩みを振り返ると、5年間の助走期間をおいて1978年（昭和53年）に整備対策委員会が発足し、大学整備構想案が策定された。1981年（昭和57年）に林田知事から京都府立医科大学整備基本計画が発表され、まず中央診療棟の建設がスタートした。それ以来1998年（平成11年）まで槌音が絶えること無く、大学が一新されてきた。1879年（明治12年）、現在地に京都療病院医学校が竣工して以来、明治の末期から1914年（大正3年）までの10年間にわたる第1期改築事業、1930年（昭和5年）から1938年（昭和13年）にかけての第2期病棟改築事業をこえる整備事業で、1980年（昭和55年）7月の中央診療棟の起工式から1999年（平成11年）の基礎棟2期工事の完成まで槌音の絶えることの無い20年間であった。

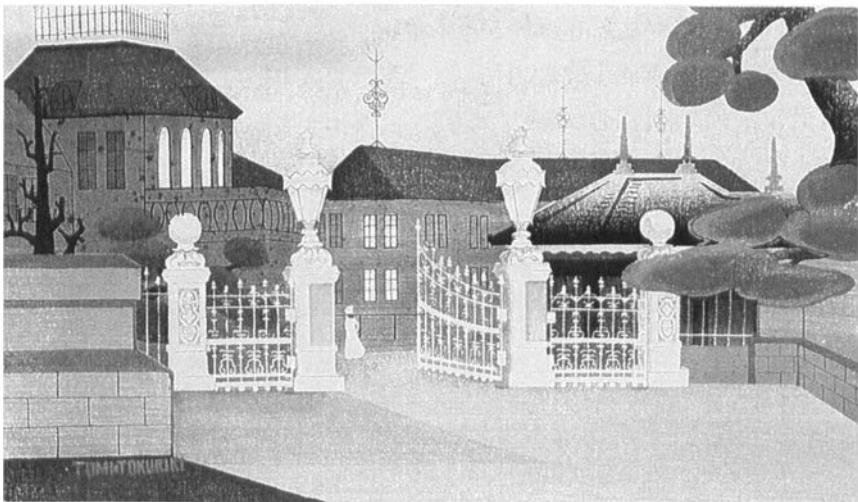
京都府立医科大学125周年記念事業が計画された際、記念式典および青蓮会館の改築と共に、この125年にわたる大学の歴史的な資料の整理ならびに100年史以降の年史を編纂することが、学友会において、また教授会において決定された。本学にはすでに「京都府立医科大学八十年史」および「京都府立医科大学百年史」があり、いずれも医学史の上からも高い評価を受けている。これに屋上に屋を重ねることを避け、今回は100年史編纂からの25年間の資料を記録として整理し、保全することを目標とした。

本誌の編纂方針としては、1981年（昭和57年）からの大学整備に至るまでの経緯を、当時の佐野豊学長が青蓮会報に投稿された文章から引用させて頂いた。また国内でも他に例が無く、また大学の発展に寄与してきた医療センターの発足の経過を、この衝に当たられた谷道之初代医療センター所長が京都府立医科大学医療センター20年の歩みに寄稿された回想文を転載させて頂いた。橋本勇元与謝の海病院長からは、現在の与謝の海病院の礎を築かれたその経過について原稿を頂いた。京都府立医科大学附属小児疾患研究施設の誕生については、楠智一初代施設長が同施設の10年の歩みに掲載された、こども病院の誕生を振り返ってを転載させて頂いた。長年の懸案であった、脳・血管系老化研究センターの発足までを、その発足にご尽力頂いた当時の藤田学長にご執筆頂いた。

この25年間の大学の発展に大きく貢献された水越治元学長が平成10年5月14日に逝去され、そのご活躍を本誌に寄稿いただけなかったことは、返す返すも残念であった。ご冥福をお祈りしたい。

教育，研究，診療の歩みについては，現在大学に居られる管理職経験者に，それぞれの時期の思い出を綴って頂き，それぞれの教室および施設の25年間は，各教室の担当者をお願いした。年表は，教授会記録および青蓮会報等より作成し，各種の資料を追加することによってこれを補完した。

本誌が創立百周年から125年まで25年の記録である。この25年の史的な評価は150周年以降に譲り，そのための資料となれば幸いである。



明治時代の本学（当時府立療病院）正門 徳力富吉郎氏作“白い門”（版画）

# 大学第二世紀の整備計画実現まで

元学長 佐 野 豊

## 1 戦後の歩み

第二次世界大戦に敗れて、窮乏のどん底に落ちたわが国の経済は、朝鮮半島に起きた戦争(昭和25年6月勃発、昭和28年7月休戦)を契機として立ち直ることができたといわれる。しかし、地方自治体が赤字財政に苦しみ、深刻な打撃を被ったのは、むしろこの戦争のあとからであった。

戦後、平和と文化のシンボルとして、多くの都道府県や市に公立大学が新設された。その数は、戦前に創立されたわが大学と現大阪市立大学を加えて30校に達した。しかし、昭和20年代後半からはじまった地方財政の悪化は、設立されて間もない公立大学を苦境に陥れ、その存在を危うくした。これらの大学の多くは、大正末期から昭和初期にみられるわが国の大学史を再現したかのごとく、国立移管によって存続を図ろうとし、地方自治体から離れていった。その数は、医科大学7校、農科大学6校に及ぶ。

自治体が財政的に苦しんでいた間に、国立大学と公立大学の間に大きな格差が生じていった。われわれの大学では、昭和33年8月から木造建物の改築が開始され、診療棟、看護婦宿舎、基礎2号館、精神科病棟、臨床医学学舎、花園学舎の順に、施設整備が行われた。しかしこの一連の建物の整備には15年の歳月が費やされ、その間、講座の増設、教職員の人員増などを見送られ、教室費、図書費、出張費等あらゆる面で、国立大学のそれらとの間に開きが生じた。

国立大学は、国家経済の高度成長に並行して内容を格段に充実していったが、公立大学はこの成長の波にうまく乗ることができなかった。しかも政府の地方に対する財政援助は、とりわけ革新自治体には冷ややかであった。そのため、苦しい中で上記の一連の整備を継続するには、大学が管理権をもっていた土地を売却し、あるいは府へ返還する措置をとらなくてはならなかった。対象となった土地は花園分院(府立体育館12,869㎡)、西構(文化芸術会館4,467.5㎡)、岡崎福ノ川町(395坪)、伏見分院飛地(867坪)および中書島(475.5坪)の5箇所である。

昭和47年7月、進学課程の新校舎が竣工し、一連の建物の整備がすべて完了し、大学から木造の建物は姿を消した。そしてこの年の11月、大学は創立百周年を迎え、記念式典が盛大に挙行された。

## 2 大学整備の夢はるか

昭和48年3月末、中村恒男学長は、新たに創設が決まった滋賀医科大学の副学長に就任されることになり、任期半ばで退職されることになり、選ばれて私が学長になった。辞令の交付を受けるため府庁に行った日、蜷川知事は、「府立医大の整備はすっかり完了しているので、府も少し楽になった」と話され、これからは内部の充実に力を注いでほしいと要望された。

戦前に建った病院の大部分、図書館、講堂等は、外観はいかにアカデミックで風情があった。しかしそれらはいずれも現代の教育・研究・診療を行うには老朽化しすぎ、手狭であった。大学が高水準の機能を発揮するには、ソフト面でも立ち遅れが著しかった。しかし私はそれを辞令交付の日に率直に知事に話す勇気を持たなかった。

昭和42年に学長に就任された吉村寿人先生は、約1年にわたって知事と面談する機会を持たなかった。当時、その理由は、「呼吸と循環」10巻、10号（1962）に巻頭言として掲載された先生の論文が、府行政を誹謗したものとして、知事の逆鱗に触れたからだときさやかれた。私は同様の轍を踏むことを恐れ、知事には手順を踏んで、大学の实情について説明し、理解を求めようと判断した。

学長に就任した直後、将来計画委員会を学内に作った。この会では、講座の増設、建物の高層化、敷地の拡充、統合移転等、多方面な問題が取り挙げられ、討議された。委員の夢はふくらみ、この会が作成した試案の内容はかなり膨大なものになった。ちょうどこのころ、立命館大学の衣笠への統合計画が新聞報道された。委員の口から跡地購入の希望が述べられたが、それはあまりにも非現実的な意見のように思われた。

昭和48年10月、わが国は突然石油ショックに陥り、経済成長は失速状態になった。府の財政が強い影響を受けることは目に見えていた。協議会が作成した案について教授会が討議するにはあまりにも状況がきびしすぎた。

昭和48年度には、公立医歯大グループの活動が実り、わずかではあったが経常経費に対する国からの援助が行われるようになった。8大学の学長は連帯し、関連省庁や自民党文教部会に対して陳情活動を活発に進めることになった。しかし私の立場は微妙であった。知事は陳情行政をすこぶる嫌がっていたし、また中央官庁の官僚たちも革新自治体に属する学長を特別な目で見ていたからである。

「京都府は授業料として月千円しか徴取していない。まずそれを国立大学並に増額してからここに来なさい」と大蔵省の若い役人に言われたこともあった。こうした辛辣な言葉に耐えることも学長の任務であった。

### 3 土地を求めて

昭和51年4月、私は学長に再任された。

百周年記念事業の最大の目標であった梨木神社境内の用地258坪は、昭和44年12月に代価59,488,000円を支払い、所有権の移転登記も済まされていたのに、緑を守る会などに反対され、その取得を断念せざるを得ない状況にあった。この交渉は昭和52年11月25日、神社側が契約金を返還することで解決した。

間断なく継続して来た努力によって、知事もまた大学用地の拡張の必要性について少しずつ理解を示し、私が適当な土地を物色することに対して賛意を表された。大学に隣接する土地、市中から立ちのいた工場の跡地など、事務の責任者たちを伴い、用地拡充の夢を胸に秘めて歩き回った。対象となった土地や建物は10件に達し、中にはかなり具体的に交渉が進んだものもあった。しかしいずれも実現の運びにはならなかった。

昭和52年2月、立命大総長としてこの大学の戦後の歩みに大きな足跡を残された末川博先生が本学で逝去された。朝が白む前に登校した私は、学長室で立命大のおもだった方がたと共に、先生の臨終の経過を耳にしつつすごした。この時、立命大もわれわれの大学が跡地を取得することを希望しておられることを耳にした。この朝、私は立命大跡地の購入に、自分のすべてを賭けようと決心した。

蜷川知事は7選目を迎えられてから、来訪者との面談を制限されるようになり、私が府庁に足を向ける機会はほとんどなかった。秋とともに、知事が8選目の選挙に出られるかどうかが京都の大きな話題になりはじめた。そして年が明け、不出馬が決定的となった。

公立大学と設置者の距離は近く、知事の意向は直接大学の運営に反映されることが多い。私たちは、新しく選ばれる知事が、大学行政に対しても高い見識を持ち合わせてくれることをひたすら念じていた。3月に入り、3人の知事候補の顔ぶれが出そろった。いずれの候補も選挙公約の中に、府立医大の抜本的整備を掲げていたことは、われわれにとって望外のよろこびであった。

### 4 新しい知事の下で

昭和53年4月9日、京都府知事選が行われ、翌日、林田悠紀夫候補の当選が決まった。28年間、いわゆる革新府政の中にいたわれわれには、新しい知事を迎えてどんな変化が起こるのか予想もできず、不安がひろがった。

4月15日、蜷川知事の退庁式が府庁の広場で行われ、18日には新知事があいさつのために来学された。20日、国立国際京都会館で催されたフンボルト留学生学術交流会の席で、私は再び新知事と顔を合わせた。5月4日の朝刊で知事の自動車を追突事故に遭われたことを知ったが、

その日、知事は大学の附属病院で診察を受けられた。

ひと月足らずの間に三度も知事と会う機会が持てるとは思ってもよらぬことであった。しかも知事が大学を信頼し、病院で受診されたことは、臨床の医師たちにとってこの上もない喜びであった。

6月7日、府からの会計監査が行われ、野中広務府議会議員（のち副知事、現衆議院議員）が来学された。この時、大学の実情について詳しく説明した。6月23日には知事も来学され、大学整備の緊急性について聴取していただく機会をもった。

7月20日、公立大学協会の会が東京で持たれ、林田知事が設置団体の長として、国に対する財政援助要望活動の先頭に立っていただいた。蜷川知事時代には考えられないできごとであった。7月下旬、大幅な府の人事移動が行われ、28日に新事務局長として三浦啓達氏が就任した。

8月、この夏の休業期間は、私にとってもっとも思い出に残る、忙しく、楽しい日々となった。11日、荒巻禎一副知事（現知事）と総務部長が大学を視察された。翌12日は野中議員、24日には野中、西田吉宏、小林弘明の3議員が来学、大学整備に関する大学の考え方について説明を求められた。

前年の夏に附属病院長に就任された水越治教授（現明治鍼灸大学長）と私は連日顔を合わせ、大学整備の構想について検討し、夜になると私が作文し、翌朝には局長の元で文案としてまとめられるという作業が繰り返された。巨額の財源を要する事業を府が承認し、現実に移してもらえるかどうか、不安と期待が交錯し、眠れぬ夜もあった。

8月26日、府庁に知事をたずね、整備の大綱を説明し了承を得た。

8月28日朝、立命館大学に天野和夫総長と西村理事を訪問、広小路キャンパス購入について交渉に入りたい意向を伝え、了承を得た。同窓の大先輩であった木村嘉一（大正7年卒）先生が同席下された。

8月30日、府議会から文教委員の議員10数名の方がたによる大学の視察が行われた。従来の慣習を破り、整備の遅れている箇所を中心に視察してもらった。手狭になって病棟廊下にところ狭しと置かれた医療機器、老朽化の進んだ基礎1号館の教育・研究施設の状況は、とくに議員に整備の緊急性を感じさせた様子であった。

8月31日、整備構想の要約を文教委員会の正・副委員長、知事並びに副知事に手渡し、内容を説明した。

9月1日、立命館大学と跡地購入について、事務レベルでの交渉が開始された。

9月6日、中村文雄校友会会長、木戸三郎理事らが知事部局に対し、大学整備について陳情した。

9月7日、旧知事公舎において知事査定が行われ、大学整備のための調査費を計上することが認められ、秋の府議会に予算として提出されることが決まった。夏季休暇中、水越病院長、



三浦事務局長らと共に流した汗がむくいられ、整備の具体化に一步踏み出されたことで、この日は私にとって生涯忘れることのできな感動の一日となった。

秋が来て、授業が開始された。

9月14日、学内に整備対策委員会が設置された。

9月16日、学友会が府議会に請願書を提出した。

9月18日、学友会役員による知事への陳情が行われた。

9月21日、府議会に提出される9月補正予算内容が記者発表され、大学整備調査費の計上が明らかにされた。

10月11日、学友会からの請願が採択された。

10月14日、調査費100万円が府議会で議決された。

11月6日、立命館大学に不動産鑑定のための、土地の実測を申し入れた。

大学整備構想は、対策委員会で練られ、細部についても具体化して来たので、11月24日荒巻副知事に、11月27日に林田知事に、さらに12月1日野中副知事にその内容を説明した。

12月2日、京都ホテルにおいて、知事、副知事と教授会との懇談会を開催、整備の実現に向けて積極的に府政を進めてこられた府当局に対しお礼を述べるとともに、大学の将来について意見を交換した。

12月5日、京都市助役、市議会議長を訪問、大学整備計画について説明し、建物を高層化することについて理解を求めた。

12月7日、整備委員会において整備構想案が決定、14日の教授会で承認を得た。

12月18日、京都市都市計画局長を訪れ、建築計画内容を説明、了解を求めた。

年が明け、府、市との間の事務的な折衝が忙しくなった。

昭和54年1月5日、京都市事務局と協議。

1月13日、副知事、市助役、市議会議長に会い、構想案の内容について説明した。

1月19日、朝9時半から、旧知事公舎で昭和54年度予算に対する知事査定が行われた。そして、この年を初年度とする第一期整備工事として中央診療棟の建設のための実施設計費7,700万円を計上、2月の定例府議会に諮ることが認められた。

1月25日、教授会に内定した当初予算について資料を配布して説明、整備が開始の運びになることを報告した。

2月1日、整備構想案が知事の決裁を受け、ついに正式の計画となった。

2月5日、構想について文教委員会に報告、同日内容が新聞発表された。

2月28日、立命館大学跡地(11,136.28m<sup>2</sup>)の購入について知事の決裁が完了した。戦後、縮小につぐ縮小を重ねて来た大学用地は、やっと拡大に転ずることになった。

3月6日、立命館大学と第一回の土地購入に関する価格交渉がもたれた。

3月10日、府議会において、前記設計費7,700万円が議決された。

3月17日、これまでの経緯を取りまとめ、知事に詳細を報告した。

3月30日、知事室に林田知事を訪問し、一年間のさまざまなご援助に対し謝辞を呈し、学長退任の挨拶を述べた。

3月31日、学長の職を解くとの辞令を受け、翌日2月15日の教授会で新学長に選ばれた水越治先生にバトンを引きついだ。

## 5. おわりに

大学第二世紀の大整備拡充事業が開始されてすでに10年が経過する。この間、大学は、外観、内容ともに格段に充実し、見違えるばかりの発展をとげ、さらに将来へ向けて飛躍しようとしている。この一連の事業の発端に当たる時期に、学長の重責を担わせていただいたことを、私は光栄に思う。

大学整備の重要性に深く思いをいたされ、巨額の府財政の支出を決断された、時の林田悠紀夫知事、野中、荒巻両副知事、府議会の議員の方がたに対し、私はお礼の心を忘れたことはない。また構想の立案に、次から次へアイデアを与えていただいた水越治明治鍼灸大学長、困難な事務的折衝にあたられた三浦啓達元局長との、多忙の中にも夢をふくらませ活動した日々も忘れることはできない。

この計画が実施の運びに至ったのは、さらに府立医大を愛し、その発展を願う多数の学友諸兄姉、あるいは学内の職員、学生の熱い支援があったからにほかならない。本稿の筆をおくにあたって当時をふり返り、心からお礼を申し上げる次第である。

平成元年7月18日 青蓮会報第69号：19～22より転載

# 医療センター誕生前後の回想

初代医療センター所長 谷 道 之

## 1 はじめに

平成3年、京都府立医科大学の「医療センター」が設立20周年を迎え、その組織機構及び管理運営がいよいよ確立し、大学そのものの機能を補完すると共に、京都府の保健医療行政にもなくてはならない存在となりつつある姿を見て、慶賀に堪えません。私自身「医療センター」の草創の時期に関係した一員として誠に感慨深いものがあります。

昭和57年、水越学長の時代に「医療センター10周年」を記念して「京都府立医科大学医療センター10年の歩み」と題する冊子が刊行されています。この冊子には、「医療センター」設立以来の貴重な歴史が綴られています。しかし、「医療センター構想」といった新しいコンセプトが水面下で渾沌の中から生まれ、昭和45年11月22日、ホテルフジタにおいて開催された教授会の席で当時の蜷川知事から「医療センターを設置して…」という言葉によって正式に表明されました。これを契機として、「医療センター」設置へ大きく動き出したのであります。しかし、その誕生も決して安産ではなく、紆余曲折、「医療センター構想」という新しいコンセプトを巡って大学と府関係者との間で精力的なやりとりが行われたのであります。

この新しいコンセプトの受けとめ方については、大学側でも教授会において喧々囂々の議論が積み重ねられました。前述の「医療センター10年の歩み」の中で、橋本勇教授が「府立与謝の海病院の歩み」について記載されていますが、その文中に、10年経っても「医療センター構想」の理念がまだよく咀嚼、理解されていないことを嘆いておられます。

私は、「医療センター10年の歩み」には殆ど記載されていない「医療センター構想」誕生前後の水面下での動きに焦点を合わせて、その歩みを記しておきたいと思います。しかし、これらの大部分は正式な記録がなく、当時の関係者の記憶に頼らざるを得ませんでした。したがって、勘違いの部分もあるかも知れないし、内容によっては、表に出すべきものではないものもあるかも知れませんが、既に20年も過ぎたことであり、このような点については、私の意のあるところを御理解いただき、御容赦いただければ幸いです。誕生以前の生みの苦しみの中にこそ、「医療センター構想」の原点が明確に浮かび上がってくるからであり、このセンターをさらに発展、充実させていくために、常に振り返り、押さえておかねばならない大切な事実が存在していると確信しているからであります。英国の名宰相ウインストン・チャーチルは次のよ

うな言葉を残しています。「より遠く過去にさかのぼることができるものは、それだけ未来を見渡すことができる」。

## 2 医療センターの理念

医科大学の役割は「教育・研究・診療」にあり、この三者は相互に独立しているものではなく、まさに三位一体の関係にあります。しかも、「京都府立」という公立医科大学であるからには、少なくとも京都府という地域における医療の中核的役割を果たさねばならないことは、一般社会からみれば常識というべきものでしょう。

他方、大学側自体からみても、医学・医療の爆発的な進歩、発展は、その研究領域をさらに拡大、深化し、これに伴う医学・医療の教育ないし研修は大学固有の場のみでは不十分であるといった傾向が、当時すでに顕在化しつつありました。

ときあたかも大学紛争に伴って従来のインターン制度が廃止され、新しい研修医制度が生まれ、大学附属病院以外にも教育指定病院制度が新設されるに至りました。このような状況の中で、大学も人材育成の場として、いわゆる関連病院など外に向かって関心をもたざるを得なくなりました。そこで与謝の海病院など府立病院に対しても積極的に取り組まなければ、近い将来大学自体の発展も困難になってくることが予測されたのであります。ここにおいて多くの議論の末、先ず最初に取り組む与謝の海病院を含め、京都府全域が京都府立医科大学の「キャンパス」であるべきだという壮大な理念が生まれてきたのであります。

## 3 生みの苦しみ

### ① 京都府と丸本学長代行

知事の予算査定の際、丸本学長代行が「医療センター」の教員併任に関連して、当該教室の増員を要望されたのでありますが、蜷川知事の実情が得られなかったのみでなく、「便乗するな！医大には頼まない」という知事の発言がありました。あとで述べますが、学長代行の要望の内容は事務的な常識では考えられないものであるだけに、事前の詰めが十分でなかったのは確かであります。未だに全国に類を見ないこの「医療センター」を確実に発展させ、京都府の保健医療行政を充実させるためには、大学医師の派遣が一時的なものであってはならず、永続させなければなりません。しかし、そのような仕組みが大学そのものの本来の機能を人材面で損なうことがあってはならないことは当然であります。

当時、私は病院長代行であったので、従来から与謝の海病院に最も関係があり、その当時の運営上の問題点を十分に知悉されていた第二外科の橋本勇教授の意見を聴き、何回となく議論を闘わせました。そこで到達した結論は、当面の問題となっている与謝の海病院へ派遣する医師は、十分な学識と経験をもっていなければならない。このような能力をま

だ持っていない若い医師を、大学から遠く離れた与謝の海病院に行かせるならば、併任で講師にするとか、助教授にするからという発想では、若い医師だけの組織となり、一時的なものはともかく、病院の運営を的確に永続させることができなくなる恐れが強い。また、若い医師の組織であると、地域で開業されている医師との間にトラブルの起こる可能性が大きい。つまり、開業の医師でも十分に対応できる疾病をもった患者まで取り扱うことになるからである。地域の医療を充実するためには、なんといっても地域の開業医との関係が大切であり、互いに足らざるを補う役割分担が必要であり、一方、相互に医学、医療を勉強する場と雰囲気を作らなければ地域医療のレベルを高めることができない。そのためには、それだけの学識と経験をもち、中堅級以上の十分な指導力を持った医師を何よりも真っ先に派遣する必要がある。このような指導者が先ず派遣されれば、若い医師も大学にいらなくても勉強することが出来るし、その地域に特有な疾病の治療など、大学では経験できない勉強も可能となる。このことによって、若い医師も大学から離れるから、或いは僻地に行くから勉強できないといった不利な点がなくなる。決して経済的な優遇のみで解決できる問題ではない。

以上が橋本教授とのやりとりの結果であります。大学にとっても欠かすことのできない指導者的な医師を派遣すれば、当然、それだけ大学の機能が低下しますし、どんな方法をとっても直ちにこれを補う方法はありません。しかし、大学が意思統一をして取り組むということになれば、大学にとっても欠かすことのできない優秀な指導者を真っ先に派遣しなければならず、このことによって大学自体が蒙る不利な点を早急に解決する方法を模索しなければなりません。その結果出てきた考えは、当時、私どもが「パー・パー」と称していた増員形式であります。それは、与謝の海病院へ10名増員派遣すると同時に、大学自体の教員定数を10名増員するということでもあります。後者は次の交代時期に、先遣要員に劣らない優秀な指導者の人材を養成しておくための要員であります。このように与謝の海病院への派遣要員10名に対して、大学側も10名増員するということで、これを「パー・パー」と称していました。

事務的に考えれば、10名派遣しても、大学はその欠員を埋めることになり、しかも派遣医師は併任であるから、全体として既に10名増員したことになります。その上さらに大学自体の定員を増やすということは、増員数が適正かどうかはともかく、常識的には理解を越えたものであったことは確かでありましょう。このあたりの詰めが不十分であったことは否めないものがあります。従って、このような要望を持って予算査定に臨まれた学長代行に対して、知事が「便乗するな！」と発言されたことは無理もなかったことと私は考えております。

## ② 事務レベルでの苦労と努力

与謝の海病院医師派遣に伴う増員の件についての蜷川知事と丸本学長代行との会談は、事実上決裂の状態になり、このような最悪の状況を打開するには、まず白紙の状況に戻す必要があります。しかし、丸本学長代行の立場では、いまさら再度知事に会ってどうこうする問題ではなく、その御性格から言って、善後策についての話はありませんでした。そこで当時の鞍岡事務局長の考えに基づき、その日の午後、私は鞍岡事務局長とともに山田副知事にお会いし、午前中の知事と学長との問題について、わたしから釈明し、与謝の海病院に関連する増員の件について、再度検討していただきたい旨お願いしたところ、「大学はあまり無茶を言うなよ」という発言がありました。

しかし、その後、山田副知事並びに関係部局の方々の御配慮によって、与謝の海病院については9名、大学教員6名（講師3名、助手3名）の増員ということに落ち着きました。いわゆる「パー・パー」ではありませんでしたが、事務的には常識では考えられないような大学側の趣旨を、行政側が基本的には十分汲み取っていただいたことは、画期的なことであり、その後、「医療センター」がさらに飛躍的に発展していく上で、大きな原動力になったものと固く信じて疑いません。知事、副知事並びに関係部局の方々の積極的な御理解とその御努力に対して、あらためて感謝する次第であります。

このことによって、三品頼甫講師（副院長）、辻俊三講師、中村充男講師、岡隆宏講師（現在、本学附属病院長）等、錚々たる人材が派遣可能となり、これらの方々が与謝の海病院の充実、発展を確実なものにしたのであり、あらためてその御苦労と御尽力に対して深甚なる敬意を捧げる次第であります。

## ③ 洛東病院への対応

### ㌈ 洛東病院の歴史と安住義人院長

洛東病院の歴史は古く、京都府立医科大学の創立後間もない明治9年9月に東山建仁寺内に「驅梅院」として発足しております。明治15年には祇園花見小路に新病舎が建ち移転、大正15年には現在地に新病舎が建設され移転し、昭和21年には京都府立平安病院と改称されています。そしてこの頃から、一般外来患者の診療が開始され、昭和25年7月には内科、外科、産婦人科、皮膚泌尿器科、小児科が設置され、安住義人先生（本学昭和5年卒業、故人）が院長に就任されました。その後、昭和30年11月には「京都府立洛東病院」と改称され、一般病床84床、結核病床66床となり、結核治療を交えて新しい方向に運営されることになりましたが、この時点で安住院長は勇退されました。その際、本学から院長を迎えるべく、大学に後任人事を要請されましたが、後で述べますように、安住先生の言葉によれば「教授会が後任院長の推薦を拒否した」ということになっております。事実関係はよくわかりませんが、適任者がいなかったにしても、大学の対応が

極めて冷淡であったことは確かなようであります。当然、その後は本学の手を離れて運営されることになりました。

(イ) 洛東病院と医療センター

昭和40年頃から、これまでの結核療養所としての役割は漸次小さくなり、疾病構造の変化にあわせて、洛東病院は脳卒中などの老人性循環器疾患専門病院に転換すべく、昭和45年11月から病棟の全面増改築工事が始まりました。時あたかも「医療センター」がらみで与謝の海病院への取組みが討議されている最中でありました。一方では洛東病院が京都大学の主導の下に、循環器センター的な方向で一足早く工事が始まっていたことに対して、学内ではいろいろな苦情が出てきました。「府立医大は近くにある洛東病院ではなく、なぜ遠く離れた僻地ともいうべき与謝の海病院に行かねばならないのか」といった素朴な不満であります。

しかし、洛東病院の増改築に伴う医療機器の選択、購入の段階になって、大学紛争の影響もあったと思われますが、当時の運営の中心となっていた京都大学側の意思統一が不十分でいろいろな混乱が生じてきました。循環器専門といっても成人、老人を対象にするということになっていたにも拘らず、購入予定機器の中には、子供の循環器疾患にまで拡大しようとしているのではないかと思わすものがあり、内外から問題が吹き出し、昭和48年2月新病棟竣工を目前にして、最終的にどのような形で開院にもっていくかについて衛生部は苦慮していました。

しかし、周囲の状況は、洛東病院も府立医科大学の「医療センター」の中で対応できるのではないかといった考え方に傾いていくのを促す結果となりました。そこで当時の中村恒男学長（昭和46年7月～昭和48年3月）が山田副知事に会い、洛東病院を京都府立医科大学で運営したい旨、意思表示されましたが、「洛東病院の運営については、以前医大に要請したことがあったが、断られた事実がある。」とう副知事の発言があったとのことであります。私（附属病院長兼医療センター所長）も、先に述べました先輩の安住義人先生（元洛東病院長）に儀礼的な趣旨で、洛東病院の運営を府立医大の「医療センター」で取り組む方向で考えている旨話したところ、「昭和30年、洛東病院を退任するに際し、院長以下、医員を派遣してくれと大学に頼みに行ったのに、教授会で拒否された。そこでやむを得ず京都大学から来てもらったのだ。その苦労も知らずに、近代的な病院に転換が行われつつあるのを見て、今になって欲しいというのは虫が良すぎるのではないか。」という厳しい指摘があり、母校の教授会に対する強い不信感と怒りを持っておられたのに驚きました。さらに、当時京都府の医療機関整備審議会の会長であった西尾雅七（京都大学）名誉教授にも、一応了解を求めるために面談しましたが、明確によろしいといった言葉はなかったように記憶しております。

過去にいろいろな問題点はありませんでしたが、今後「医療センター」として取り組んでいく上での反省点として心にとめておく必要があります。いずれにしても、昭和48年2月に新病棟が竣工し、脳卒中を中心とする循環器疾患の専門病院として再発足することになり、佐野豊学長（当時）のもと、既に定年退職されていた丸本晋院長を含めて7名の医長、医員が派遣されました。しかし、いろいろな困難があつて、本格的な診療開始までに約1年を要しており、その後も非常な御苦勞をなされましたが、この詳細については「京都府立医科大学医療センター10年の歩み」に譲ります。ここでは是非記しておきたいことがあります。「医療センター」と与謝の海病院とに関連する増員の件で、当時の丸本学長代行と嵯川知事との間に激しいやりとりのあつたことは既に述べましたが、洛東病院の院長人事について、病院内外に難しい問題をかかえている同病院の院長は丸本先生以外にはないという知事の助言があつたと聞いております。寡黙で意志の強い丸本先生と知事との間には強い信頼関係のあつたことを裏付けるものであります。

#### 4 むすび

「医療センター」は、京都府立医科大学の教育・研究・診療という機能と府の衛生、保健、環境、福祉といった領域の行政機能とを有機的にうまく結び付け、両者が共に充実、発展し、府民の医療、保健、福祉により大きく貢献するための組織であり、いわば大学の機能と府の行政機能とをうまくマッチングさせるためのインタフェースとも言うべきものでありましょう。したがって、時代の流れとともに、このインタフェースの機能を時にはチェックし、修正あるいは改善し、バージョン・アップを図らなければならないこともあるでしょう。そうでないと、両者の機能がうまくマッチしないことも起こる可能性があります。

いずれにしても、「京都府立医科大学医療センター」は、他に類例をみない全くユニークな素晴らしい存在であり、生みの苦しみはあつたにせよ、大学と府との両者の先見性と英知の結集の賜であります。この「医療センター」が今日のように発展できたのは、伝統ある京都府立医科大学なればこそ、また歴代の知事を長とする京都府なればこそ可能であつたのだと、20年経ってみて、ますますその感を深くするものであります。今後のさらなる御発展をお祈りする次第であります。

最後に、この拙文は、はじめにお断りしたように、正式の記録は殆どなく、主として私自身の記憶と当時「医療センター」に深く関わられた大学並びに府の関係者の記憶されていることを土台にまとめたものであり、これらの方々にあらためて深謝いたします。

京都府立医科大学医療センター20年の歩みより転載



## 与謝の海病院回顧

元与謝の海病院院長 橋 本 勇

大学設立百二十五年を迎えて、記念史を制作するという計画があり、筆者にも与謝の海病院について、何か記事を書けと依頼が届いた。このようなことは余り得意ではないし、過ぎ去った過去の記録は、殆ど手元に残していない。また記憶がすこぶる曖昧であるから、この任ではないなと思いつつも、ウツカリしてお断りする機会を失ってしまった。自業自得である。頼りない記憶を呼び戻して、この責めを果たしたいとペンを取った次第である。多くのことは、大学百年史をはじめ与謝の海病院記念誌に記載されているので、重複を避け、この病院が改築された頃の府や大学の考え方で、知られていなかったり、誤解されている部分を少し紹介し、将来の参考にさせていただくことにしたいと考えた。誤りもあるかと思うがご寛恕願いたい。

そもそも筆者が選定された理由は、昭和四十年代に、この病院の再建計画が検討された時期に、たまたまその計画、立案に関与し、また新しい構想による地域医療の在り方を模索し、加えてその計画を実行するメンバーの一人であったからに他ならないと思っている。

### 与謝の海病院の改築整備の経緯

当時何があったのかは、大学の創立百年史をはじめ、病院の記念誌などにも詳しく記述されているので、この記述の中には余り重複させないつもりであるが、かいつまんで必要なことだけを述べておきたい。昭和四十年の前半には、府立医科大学も当時の学生運動の熾烈な洗礼を受けて、大学は荒廃し、教育はもとより病院の診療さえ正常には実施されなかった。しかも大学から地域の病院に派遣されて、地域医療に携わっている医師までも、その多くは当時の時流にのって、自分の判断のみで職場を退き、大学に帰る医師が増え、病院によっては、日々の患者診療でさえ不可能になるという有様を生じた。

与謝の海病院もこれらの例にもれず、当時の矢野輝男衛生部長が院長を兼務し、2名の医師のみが病院に残っていたにすぎなかった。その一名が筆者の教室に所属する矢島医師（現、舞鶴保健所長）であり、もう一人は京大結核研究所から派遣されていた、肺結核専門医の渋谷大先生であった。どの病院からも殆どの派遣医師が帰学する状況になった時、矢島医師も筆者のところに来て、彼も帰学の許しを受けたい旨申し述べたが、筆者の説得で病院に踏みとどまることを了承された。本人はおそらく、こんなエピソードを披露することはないであろうから、この話は初公開だと思うが、このことが、筆者の心に強烈なインパクトを与え、この病院の将

来を真剣に考えるきっかけとなった。これ以前に岩佐病院長の辞任があった。きくところによれば、5年間の約束でこの病院に出張されていた先生は、この間に病院の実状を明らかにし、その改善法については、京都府、府立医科大学にもいろいろ意見具申をされていたが、全く反応がないため、意を決してこの病院を去ることになったという。まさに断腸の思いであったに違いない。故川村教授が退任された今となっては、自分の任務はすでに終了したと考えられたのであろう。彼の前任であった東先生が川村教授の人事でこの病院の院長に派遣された経緯については、東先生自身が病院の発刊した“30年のあゆみ”のなかに記述しておられるのでこれを参照にされたいが、その人がなぜ3年の在任で、急に岩佐先生に交替されたのか、今もって筆者にはよく理解できないでいる。また、川村教授の後任である筆者には、与謝の海病院のことについては、何の指示も残しておられなかったし、事情も説明のないままであった。それ故に、紛争に明け暮れていた筆者は、岩佐院長との間で病院のことについて、詳細はじっくりと対話したこともないままで終わっている。話を聞きたいと思う頃には、すでに病院長は辞任しておられ、後任の病院長は府の当事者でもある矢野衛生部長が、兼務しておられたわけである。このような情勢のなかで、この病院の危機を感じた第二内科の医師が、交替で診療の応援に駆け付け、少なくとも診療の火は消さない努力をされたが、このことさえも、当時の雑然とした雰囲気紛れて、知る人は少ないと思う。また当時の病院事務部長が大学の教授を訪れ、医師の派遣を依頼するという、奇妙な現象にも出くわしたが、これとて、この病院がでくわした状況が、それほどの危機にあったのだと想像がつく。

この頃の教授会で、与謝の海病院にどのように対応すべきかという議題で、討論が続いていたが、筆者は青二才の教授である身もかえりみず、“与謝の海病院は大学で面倒をみるよう対処すべきである”という意見を述べた。そしてその医療に関する方策については、大学が積極的に考え、府をリードすべきであるとも付け加えた。ある意味では当時、暴論と理解されても仕方がない意見ではあったが、自ら信じることであり、いくつかの方策を考えたいというのである。与謝の海病院には先代の川村教授が、病院長や外科医師を派遣していたとはいえ、そのことで筆者がしゃしゃりでて、どうするというほど実力のある教授でもなく、この病院についての大学のこれまでの対応がどうなっていたのかなど、何一つ知らない状況ではあったが、京都府立医科大学が行う医療に協力するのは当然であり、また医療の考え方については、大学が見識をもって医学を地域に還元すべきであると、常々考えていたのでこの発言になった。教授会の空気では、これはまずいかなと思ったが後の祭りでは、一瞬シンとした状況が訪れた。増田教授が賛成の発言をされた以外は、特にどなたからの反論もなく、半分は有耶無耶のうちに筆者がこの任務を引き受けることになった。奇妙な話で申しわけないが、筆者はこの病院に縁があるのかな、と感じた思いを忘れないでいる。誰かがこの仕事を引受なければならない状況にあったから、多くの先生達は正直やレヤレという気持ちであったらと思う。こんなことから次の

事情へと物事が流転してゆくことは、誠に興味深いことであり、人生の在り方をしみじみ味わうことでもあった。しかし、少なくとも筆者の記憶のなかには、教授会でこの病院に対する基本的見解については、徹底的に討論し結論をだしたということはない。このことが、後でのべる医療センターの解釈に、必ずしも一定の見解が見いだせないということや、その仕事は意味は何だという疑問に付きまといわれる原因になっていると思う。このことについては、さらに説明を加えることが必要であるが、後述することにした。

### 与謝の海病院について

筆者は前述した教授会の結果をうけて、与謝の海病院の病院長を兼務することになり、この病院の改築、再建について自分なりの意見をまとめた。これは当時の衛生部医務課長谷岡豊次氏の助言によるもので、これをもとに嵯峨知事との面接が許され、最初は矢野衛生部長同道で面会できたことを思い出す。それ以来必要に応じて、何遍か知事に面接してご指導をうけたが、それまでに聞かされていた人とは随分違っていたので、かなり無礼な意見を申し上げたようにも覚えているし、知事もよく耳を傾けてくださった。この間の会話のなかで、今でも思い出すいくつかの名言を懐かしく思い出すが、この紙上では省略したい。知事のユーモアや、皮肉があったりして随分勉強させられたりしたが、知事自身は医大に、いろいろの期待を抱いておられたことも真実であったと思う。しかし、おそらく知事の口から、直接そんな言い方で発言はしておられなかったであろう。ユーモアと皮肉が強烈で、人によっては誤解されることも多くあったと思う。

### 医療センターのこと

知事と筆者が交わした会話のなかで“医療センター”という言葉が用いられた。筆者が与謝の海病院の改善案を説明した時に、この病院は京都府の北部、あるいは丹後地区などの、地域医療のセンターでなければならない、すなわち、後には地域中核病院として認識される意味をもつ病院であるべきことを説明すると、知事は、それではいくつかの地区に、そのようなセンターを設置すればよいネと反応された。そして暫く京都各地区の病院を話題にし、この会話のなかで、センターらしい病院がない地区はどこかネ、と尋ねられた。それで南部だと考えていますと返答したが、それから何日かたって、記者会見か何かの機会に府の南部にも、“医療センター”を設置したいと考えている旨の発言をされたようで、これが新聞に掲載されたことを覚えている。この発言は府の内部にも多少の混乱を生じたようで、結果としては、黙殺されたまま進展しなかった。これらのことから察するに、地域での“医療センター”構想が発展し実現でもすると、当時府にかかる費用は莫大で、結局は、出来るものも出来ないことになるのを、府の職員が憂慮して、この発言については、適当に処理したのであったろう。このような試行

錯誤をかさねつつ、与謝の海病院改築、再建の問題は、府立医大にも重大な課題をなげかけつつ、急速に進行していたというべきであろう。

ここで“医療センター”についての筆者の見解を、設立当時に立ち戻って、すこし述べておきたい。前にも記したように、筆者は京都府立医大はその目的によっては、京都府の医療の推進に関与するのが、当然であると考えていた。大学は教育、研究、診療を3本柱として、それぞれの夢を追いかけていたが、学生紛争の結末として、その夢がみごと破壊され、また喪失した人々も少なくなかったと思うし、反対にそれからの新しい夢を実現してみようと考えた人々もいた。筆者などは後者に属していたので、大学という基本的なことに基いて、公立大学も国立大学の亜流ではなく、公立としての特色を発揮すべきであると、常々主張していた。そこで府の職員とともに京都府の医療に関する課題や、施策について意見を交換し、基本方針を定めることに協力できるのではないかという考えを示した。基礎医学の研究とは異なって、臨床には診療が重要な部門を占めるし、大学で学ぶ医学を医療として地域に還元することこそ、意義があると考えるのは、論を待つまでもない信じていた。そこで大学に“医療センター委員会”を設置して、このような役割を果たしてはどうかと提案し、当時の谷病院長や、谷岡課長を通じて矢野衛生部長らと、相談を繰り返し、このような委員会の設置も試みたが、この新しいコンセプトについては、容易に了解が得られるものではなかった。おそらく府当局でも、大学の中でもこの全く新しい考え方については、それぞれ自分の側の有利な理解を優先し、必ずしも意見は一定しなかったのは無理もなかったと思う。それ故に、与謝の海病院の整備を主にして解決したいと思う府が示した姿勢は、かなり大学の意見や要求に耳を傾けようというもので、これは随分今までと違った対応であったと筆者は思い込んでいる。大学のなかでも意見は必ずしも統一されてはなかったと、言うのが正しかった。おそらく、このややこしい状態を調整するために、事務の当事者は必死の状態であったと想像がつく。それ故にこそ、医療センターの真意が定かでないと言われるのだ。後になって水越学長時代に、医療センターの定義が、教授会に提案され驚いたが、その時不思議に思ったこともある。

筆者は教授会で発言した結果として、昭和46年4月1日には、与謝の海病院長の兼務が発令された。辻俊三内科医長、内田悦弘主査が医員として同時に発令されたが、この発令は、とにかく病院の体制を整える方策であった。そして同年6月1日をもって、前の3名に加えて内科、外科を併せて7名の医師を派遣し、計10名の医師が併任医師として、与謝の海病院に勤務し、新しい計画で再建、改築を実施することになった。このメンバーとしては三品頼甫助教授をはじめ、岡講師ら精鋭の陣容であり、今後の与謝の海病院の整備、改築にとってまことに頼もしい限りであった。

## 大学と与謝の海病院医師の併任

この“医療センター”の課題の重要点には、大学の職員と与謝の海病院の医師との併任をどうするか、そして教室から助手以上の人材を派遣した場合、大学の人員をどうするのか、という極めて難しい問題を抱え込むことになった。しかも当時は、大学紛争の直後で大学は荒廃していたため、すべてがまず大学の復興を優先するというスローガンに集中されていた。その最中に多くの人員、しかも助手以上の地位にいる職員を、京都府の医療に貢献するとはいえ、10名以上も僻地の病院に派遣する暴挙は、一体何事であるかという批判は当然で、これを避け、その意義を理解させるためには、大学の側にもスタッフの増員を必要とした。これはまさに苦肉の策であり、賭けであると承知しつつもこの暴挙の敢行を、進言せざるを得なかった。病院の職員を大学と併任するだけでも異例であるのに、スタッフの数まで増員するとは、まさに破天荒な要求であると言われて当然であった。しかしその当時は、与謝の海病院のような僻地に派遣される医師は、島流しのような状況で、再び大学に復帰できることはなかったし、肩書きだけの非常勤講師がその引き出物であった。むろん大学に居座りたい医師は、このような僻地に派遣されることを拒んだし、ままたそれが許されることもあった。これがまことに不合理なこととして紛争の目標にも挙げられていた。しかも派遣される医師の多くは、比較的若年で経験も少なく、現地の開業医師と患者のことで、トラブルを起こすこともまれではなかった。このような状況を加えて解決し、大学、地域医療の推進、良質の医師の確保には、筆者は前述した方法を執るしかないと確信して進言を繰り返していた。このような状況のなかで、定期の移動があり、筆者は大学の附属病院長となり、それまでと異なると、医療センター所長は附属病院長の兼職から離れて、独立した管理職として、前任の谷教授がその地位にあった。それで、彼が医療センター20周年の記念誌の中で記述されている、知事と丸本学長代行の、人員に関する交渉決裂のエピソードについては、何故か筆者は耳にしていなかった。今になって思うことは、知事に対しての説明が不十分であったのではないかと考えている。したがって、この問題に対する最終結末のつけかたについては説明は受けていない。筆者は、結果を現実として受け取ったので、府と大学との間にこの課題に対する相互の認識が、少しであれ了解されたことだけで、筆者には嬉しいことでまず十分であった。すなわち、これは数の問題であったが、実際は数の問題に拘って、解決すべきものであるとは考えていなかった。結果としては良かったかもしれないが、経過としてみると残念な足跡を残してしまったと思う。

もう一つの問題は、与謝の海病院勤務医師が、大学病院への研修帰学をすることである。この原点は、優秀な医師を急に大学から病院に移動したので、少なくとも部長級の医師には、週一回、大学病院の外来クリニックでの診療を続行させたいということであった。というのは併任として勤務した医師が大学病院でも、自分の専門領域で診察することは必要であるし、また

以前のように、大学から忘れられてしまうことも、少ないであろうと考慮した結果である。しかしこのことが、何時の間にか全部の医師の特権のようになって、甚しきはアルバイトのためにこれを利用するようになったと聞くと、筆者は驚き、かつあきれ返っている。せつかくこのようなシステムを許可してもらっているからには、それをただ自分の都合のよいようにだけ解釈し、頭や目が常に大学の方にばかり向いていたり、金銭のことに結びつけるのは、まことに不当な行為であると言いたい。これについて筆者に誤解があれば許していただきたいと思うし、訂正するにいささかも抵抗するつもりはない。

すでに与謝の海病院は、天橋立を一望できる阿蘇海のほとりに、昔日の大戦艦を彷彿させる偉容を誇る、大総合病院として確立している。引き続きこの病院で活躍し、発展に寄与された方々に、心から感謝の意を表し、またその言葉を贈りたいと思っている。これは大学からここに赴任された医師のみに贈るのではなく、京都府知事をはじめ、府からこの事業に関係して今日まで、我慢づよく一緒に、京都北部地区の医療の拠点を作り上げられた人々に、尽きることのない感謝の意を捧げたいと思う。

### 結びと願い

大学の百二十五周年史への寄稿を依頼されながら、こんなことになってしまったが、大学に設置された“医療センター”そして与謝の海病院をはじめ京都府関係の医療部門に、多くの医師が派遣され、活躍できる一つのシステムが、曲がりなりにも完成した意義は計り知れない意義を示したと思っている。

おそらくこれは、公立大学であればこそ可能であったと思う。公立大学が国立大学とすべてが同じである必要は何もない。色々な面で大学の特色を発揮できてこそ、その大学は光り輝くのではないだろうか。筆者は事あるごとにそのように考えてきた。その一つが与謝の海病院の在り方で、一步ふみだすことができた。将来はというよりも、現在この病院は何をなすべきなのか。京都の北部全体の医療の先達を勤めなければなるまい。比較的潤沢な医師に恵まれて、この医師達にどのような場を与えて活躍させ、そして勉学、修業させるのか、それはこの病院に与えられた新しい課題であるといえる。また、大学の“医療センター”がどのように指導していくのか。刮目して将来の医療の在り方を展望し、確固とした方針のもとで、運営を進められることを望んでやまない。

## こども病院の誕生を振り返って

初代小児疾患研究施設長 楠 智 一

附属小児疾患研究施設の開設に関連して一文を草せよとの御依頼だが、経過の詳細は失念していることが多いので、誕生前後の印象に残る事柄を綴った、同施設『10年の歩み』への寄稿文を転載することとしたい。

### 1 構想事始め

昭和53年（1978年）の秋、当時の佐野学長から突然電話があった。「昭和54年が国際児童年なので、京都府ではこれを機会に小児医療に直結した施設を企画する意向が固まりつつあるようだ。ちょうど本学の大型整備構想が具体化しつつあるので、それと連動してはどうかという話だが、何がしかの素案を考えてみませんか。」ということであった。降って湧いたような問いかけに私は大いに戸惑ったが、「どれ位時間を頂けますか。」と尋ねたところ「できれば1週間位で。」という返事で二度びっくり。しかし、何かしら武者ぶるいがして、急にやる気が出てきた。そこで私はいろいろ考えたあげく、以下のような3通りの案を思いついた。

#### ① 「小児総合病院」案

誰しもすぐ思いつくことは、いわゆる小児総合病院であるが、これについては東京に国立小児病院がある他、大阪、兵庫、静岡などに公立のこども病院や小児保健センターが既に存在している。しかし、いずれも対象人口が随分多いにもかかわらず非常な赤字を抱えている。京都には人口の割に小児科を有する大型病院が極めて多い。大学と赤十字病院がそれぞれ二つずつあり、市立病院、済生会病院など公的病院が目白押しである。こんな状態では独立したこども病院をつくっても存在の意義は薄く、また存在すらも危うくなる恐れがある。

#### ② 「附属病院整備構想での小児コーナー」案

附属病院には小児科病棟があり、そこに勤務する人達は、医師、看護婦などすべての者がこどもの特性を知り、それに対応できるスペシャリストである。しかし、外科系の病棟に乳幼児をはじめ様々な年齢のこどもが入院すると、日常的な保育や養護の環境が不十分なために、治療上の困難を伴う場合が多い。そこで私は、大学整備構想に当り、附属病院に小児コーナーを数フロアーにわたって設け、それらを1単位として小児医療の効率を高めることも、一つの案になろうと考えた。しかし、これでは小児医療の施設としての存在

感に乏しく、国際児童年にかかわるプロジェクトとしては主体性がないと思われる。

### ③ 「大学附属の小児施設」案

上述の二つの案には、それぞれ述べた問題点があるので、更に別の対象として考えたのが、大学病院の附属施設とする方策であった。世界のトップクラスにあるボストンの Children's Medical Center はハーバード大学の附属施設であり、私が1年間滞在した Alabama Medical Center でも大学病院の敷地内に小児病院があった。アラバマの場合は、大学病院内にも小児科病棟があり、多様な疾患の入院患者がいたが、小児病院の方は神経疾患や血液疾患など長期にわたって専門的な治療とケアを必要とする患儿が収容されていた。これらの実例と、先に述べた京都の医療環境からみて、私は今回の小児施設は従来の総合病院の小児部門とはひとあじ違った、大学らしい特徴を備える必要があると考えた。

対象とする疾患は、もっぱら先天性疾患、血液・腫瘍疾患、循環器疾患など、高度で先進的な治療を必要とするものに限ってはどうか。そして小児外科や循環器外科の参加によって手術の必要な症例を積極的に受入れることや、麻酔科の管理によって術前、術後の集中治療を可能にすることなども頭に描いてみた。端的に言えば、一人の重症な患儿を囲んで、こども病院のスタッフである小児科医、外科医、麻酔医が、それぞれの立場から意見を述べあい、治療のプロジェクトを固めていくという光景が、随時出現することを想定した。すなわち、今までのように患儿を各科へ回すのではなく、医師が患儿の所へ集まって力を合わせるという姿が、ようやく実現するのではないか。そしてそれこそが、こども病院のあるべき姿であろうと考えたのである。

大学病院に附属させるという点には、もう一つの意義があった。もともとこども病院には小児医療という専門性が要求され、スタッフはそれを誇りとして日常の仕事に命をかけるのであるが、このことはともすれば医学・医療全般の進歩から取り残される危険性を含んでいる。日々新たな医学の情報に刺激され、更には医学の進歩に参画し続けることによって、自らの専門性も高められるのであるから、遠く離れた所に孤立するのではなく、大学のキャンパス内に存在することが望ましい。

あれこれ悩み続けているうちに、約束の1週間はたちまち過ぎた。私は以上のような考え方の概略を佐野学長に報告した結果、早速構想を検討するための委員会が設置された。以後、学術的に、また技術的・実務的に多くの検討が重ねられた結果、診療面はほぼ上述した③案を骨子として具体化され、昭和57年（1982年）12月に附属小児疾患研究施設（京都府こども病院）が首尾よくオープンした。

なお、ここで特筆すべきことは、誕生までの間、佐野、水越両学長をはじめ教授会の方々によって“大学附属”の“研究施設”としての位置づけをして頂き、京都府当局によってそれが実現されたことである。その結果、新たに教授をはじめとする教員スタッフや、様々



な設備、機器が充実され、当初私が期待した以上に“大学附属”のフィロソフィーが確立された。そして今や、小児に関する医学・医療の発展に国際レベルで寄与しつつあることは、喜ばしい限りである。

## 2 “大学附属”の正解と難解

ここで少し、オープン当時の思い出を語りたい。

私は以上の経過からか、初代の施設長に任命されたが、とりあえず診療業務を円滑に進めるために、附属病院の診療主任会議に相当する定期的なミーティングを発足させた。この会議には、内科、外科(第一、第二部門)、麻酔科の医師と、こども病院担当の副総看護婦長、病棟婦長、医事課の職員などが出席し、原則的な問題や、日常の状況に関する意見を交換して、診療のシステムを固めて行くという役割があった。かつて本学で経験したことのない新しい体制を作り上げる苦労は並大抵のものではなかったが、それなりの期待感もあり、皆一生懸命に取り組んでくれた。

ただ、その経過中に強く感じられたのは、それぞれの医師が、母教室で培われた意識や慣習にこだわり、かなりの期間あたかも母教室の利益代表であるかのように発言し続けたことであった。考えてみればそれも無理からぬことで、“大学附属”であるため、ひとつ屋根の下に医局があり、教授や先輩の目がいつも気になったに違いない。さらに自分たちの身分が實際上こども病院と附属病院の両方にまたがっているので、なかなか新しい施設の人間になりきれない心情があった。最も苦労したのは初代こども病院担当副総看護婦長で、施設長、医師、看護婦、事務局、そして患者家族の間にはさまり、各方面からの苦情を一手に引き受けていたように思う。私は偶然、この施設を含めて大学附属の2つの病院長を相次いで7年間勤めたが、どこへ行っても看護部というのは、心労が多いうえに医療現場では一番頼りにされる存在だった。そして、私が接した総婦長はいずれもしっかり者のキャリアウーマンであった。

“大学附属”のもう一つの問題は、主治医の層が若く、留任期間の短いことであった。やっとな慣れた頃に新しい医師と入れ代わるので、病院の持つ特性をいちから習得させる期間がどうしても必要となる。この点は特に重症患者を対象とする施設としては、軌道に乗るまで少なからぬリスクファクターとなった。しかし、この問題も施設全体の体制や各部門の具体的なマニュアルが定着するにつれて解決の方向を辿った。難治疾患の専門施設である当こども病院には、設立の主旨からも常にトップレベルの医療を提供することが要求されるが、それに関しては大学なればこそその高次医療が行われることで大方の期待にこたえ得ることは間違いない。一方、大学の病院は、医療の場であると同時に教育の場でもある。したがって若い意欲に充ちた医師が一定のサイクルで回転することは避けられない。ただ、人が変われば患者との人間関係も動くので、その間の間隙を十分注意してカバーできるよう医療チームの結束を図ってほしい。こ

のことは、私が常にスタッフに訴え続けた要求であった。結果的に、この施設が“大学附属”として発足したことは正解だったと思うが、それに伴って当初発生した難解な問題点は、今ではとっくに解消していることと思う。

### 3 続けてほしい人の和

古くから言われていることだが、机上でつくられた組織を実際に動かすのは人である。そして必要なのは人の和である。10年前の発足当時、いろいろな戸惑いはあったが、時とともに、複数科、複数職種による「府立医科大学附属小児疾患研究施設」に固有のチームワークとプロジェクトが確立してきた。これはひとえに今日まで関係されたスタッフと、学長はじめ大学を構成する方々の御理解による“人の和”のおかげであったと考える。小児にかかわる医学・医療は、今後急速に変貌すると思われるが、本施設がますます飛躍、発展し、指導的役割を果して行くためにも、ぜひ人の和を土台にした切磋琢磨を続けて頂きたい。そして“研究は冷たく、医療は暖かに”。これが当施設の発足に深くかかわってきた私の心からの念願である。

「京都府立医科大学附属小児疾患研究施設10年の歩み」より転載

最高の医療は、患者の限りない信頼と深い愛情の上に築かれます。(ガレノス)



レリーフタイル（玄関正面）

## 脳・血管系老化研究センター発足への熱き想い

ルイ・パストゥール医学研究センター所長  
京都府立医大前学長  
脳・血管系老化研究センター前所長

藤 田 哲 也

わが京都府立医科大学に脳・血管系老化研究センターが設立されるまでには京都府と大学の、高齢化社会到来への冷静な予想と、住民の健康といのちを守ろうという熱い想いの歴史があった。

1980年代の半ば頃まで京都は日本の中でも長寿者が多い、一・二を争う長寿の府であることを誇っていた。しかし、この頃から、いち早く予見できたことは本学が置かれている環境は日本の中でも最も速く高齢化の進む状況がくるだろうということであった。ソフトランディングが必要であり、高齢化社会の体制を整備する知恵が要求されることは明らかであった。

1988年から京都府が主宰し本学が協力して国際的な長寿科学フォーラムが毎年開かれるようになり高齢化への具体的な施策が模索された。これと平行して、京都府の中では京都府高齢化対策大綱（健やか、快適、豊かな老後を目指すところからその頭文字を取ってSKYプランと名付けられた）が策定され、府立総合福祉会館の中にSKYセンターが開設される運びになった。この状況に拍車を掛けたのが、国レベルでの国立老化研究センター設立の気運である。癌センター、循環器センターに次ぐ第三の国立研究所として、長寿科学の研究センターを東京以外の所につくろう、という国の意向が伝えられたのだ。当然のことながら、京都府が誘致を申し出で、荒巻知事が陣頭に立たれ、草木副知事、谷岡出納長のバックアップを得て、片山副知事が各方面に働きかけられるのに、ちょうど学長を拝命していた私がお共をして京都府の学問的、行政的準備状況を説明しPRする機会に恵まれた。現在、本学の事務局長を勤めている針尾孝芳氏はこのプロジェクトの参謀兼事務長というところだった。このプロジェクトに関係していた全員は長寿科学の医学的、社会的必要性をひしひしとを感じる毎日を過ごしたものだ。

この頃、大学では学長を委員長とする『老化に関する総合的調査研究推進委員会』がつくられ、1987年、1988年の2年間にわたる調査研究を全学の総力を挙げて遂行した。この成果は1989年（平成元年）詳細な報告書にまとめられるとともに、府民にも広く知ってもらおうということで、『老化を考える府民医学講演会』が開催され、一方では読みやすい8冊の小冊子『健やかな長寿——老化の防止のために』が発行された。強いニーズがあり、これは非常に好評で、再版が繰り返された。

1989年の『老化に関する総合的調査研究事業成果報告書』の序文の締めくくりの言葉として、私は「本研究報告書の完成に至るまでに京都府から与えられた御援助に謝意を表するとともに、

これらの調査研究の成果が新たに『脳・血管系老化研究所』などの恒久的基盤を得て、さらに大きく発展し、京都府民にも大きく還元されるものになることを切に希望する次第である」と、大学としての想いを述べた。ちょうどその頃、国立老化研究センターは最後まで競合していた愛知県が、愛知県出身の海部総理率いる新内閣の発足という追い風と、国立療養所中部病院の広い敷地を無償で転用できるという利点から設置指定を獲得し、京都府民の期待には直接答えられない形で決定になったことを知らされた。

しかし、これで京都府の、長寿社会を予測した長期的施設に本質的な変化が起こったわけではない。この必要性に対応して、本学では1990年4月『脳・血管系老化研究センター設立準備委員会』が設置され、荒巻知事は、この委員会の議をへて本学が提案した『基礎3部門、社会医学系1部門（予定）、臨床系1部門、総研究スタッフ18名（兼任を含む）からなる脳・血管系老化研究センター構想』を推進することを決定され、研究センターは1991年、とりあえず学内の施設を転用して発足することとなった。このさい、篤志家松本仁介氏が私財5億円を京都府に寄付され、この資金相当額をそのまま新設研究センターの備品費にあてることが許されたことは忘れられない。この義挙によって、センターの整備は目を見張るばかりのものとなり、優秀なスタッフの結集とあいまって、今日の研究センターの発展につながったのである。

私が大学を去った後も、荒巻知事の英断により、病態病理部門と社会医学部門に、全国的にみても最高の2人の教授が選任され、経済事情の未曾有の難局のさなかにもかかわらず、基礎研究棟2期工事の中に、当初希望した通りの完備した脳・血管系老化研究センターの施設が組み込まれることが決定され、来る1999年3月、基礎研究棟の竣工とともに、夢に見た脳・血管系老化研究センターが完成することとなった。

本脳・血管系老化研究センターの誕生に立ち合っただけで、その完成を見ずに大学を去った私も、京都府とわが府立医科大学の熱き想いが府民の21世紀の新しい希望の星として輝きを増しつつあることに衷心からの感激の念を抱かずにはいられない。この研究センターが世界の学会と府民のために多大の貢献をすることを、かたく信じるとともに、強く期待して止まない次第である。

## 附属看護専門学校から医療技術短期大学部へ

前医療技術短期大学学部長 渡 辺 決

私は、1989年度から1993年度にかけての2期4年間、京都府立医科大学附属看護専門学校の学校長を勤め、また1996年度と1997年度の1期2年間、京都府立医科大学医療技術短期大学部の学部長を拝命した。

最初に看護専門学校長を故糸井素一教授から引き継いだ時には、すでに短期大学への移行が本決まりになっていて、その準備室も設立されていた。校長の仕事で最も重要なのは、短期大学へのスムーズな引き継ぎだと、皆さんに言われた。

当時、新しくできる短期大学の名称は「看護短期大学部」となっていた。しかし私は、将来必ず看護婦以外のコメディカル・スタッフの養成が急務となることがわかっていて。そこで、とりあえず看護学科だけ作るとしても、名称は「医療技術短期大学部」とすべきであり、それが同時に大学の格を示すことになると主張し、大学内部のあちこちを説いてまわった。教授の先生方にはほとんど全員賛成していただいたが、事務局長が保守的な方で、どうしてもうんと言ってもらえなかった。

ところが次の年になって、事務局長が交代された。早速私は出向いて、同じことを述べたところ、あっさりと「名前だけでよいのならそうしましょう」と返事をされ、次の会議からはもう名称が「医療技術短期大学部」に変わっていた。私はつくづく、事務も人なのだということを了解した。その局長は、現在府下の某市の助役として、大活躍をしておられる。

その短期大学設立も、準備室に優秀なスタッフが居て、私はほとんど何もなくてよかった。学校長が協力したのは、校長室を準備室にそっくりお貸ししたことくらいだったと記憶している。専門学校自体は、これまた優秀な主任と事務長が居てくれたおかげで、何の事故も起こらなかった。教員もみんな協力的で仲良く、きわめて居心地のよい職場だったと思っている。

短期大学の発足を1年後に控えた1993年4月、学校長は岡田弘二教授に代わった。だから私は、現在大学設立の一番重要な時期は経験していない。岡田先生は零からのスタートで、さぞかし大変だったろうと想像している。

そして1996年3月、岡田学部長は済生会吹田病院長として去られ、再び私が学部長を引き継ぐことになった。実は私は、いろいろな仕事の中で、看護婦さんのお相手が一番苦手なのである。栗山学長にもそう申しあげたのだが、考えてみれば、一度辞した専門学校が新しく発展した組織に、再び学部長として指名されるのは身に余る光栄である。努力して良い大学に仕上げ

なければいけないと、心に決めた。

専門学校と大学の違うところは、教員の研修（研究と修練）の義務のあるなしである。だから大学の機能を最も特徴づけるのは研究である。だが、看護学の研究ほどよく分からない分野はない。専門学校長をしている時、いったい看護学とは何だろうと考えたことがあり、その考察の結果を「看護学研究のジレンマ」と題して書いたこともあるが（京都府立医科大学附属看護専門学校紀要、第2巻第1号、1993年）、分からないなりに、とにかく皆に研究をやってもらわなければならない。

研究は、放っておいたらちっとも進まない。研究の進展に最も重要なのは、目標設定を行うこと、つまり人工的に dead line を設けることである。そこで、学部長になった途端に、強引に、教員同志の発表・討論の場であるセミナーと、対外的に大学研究の実を示すための公開講座とを、一挙に作ってしまった。最初はみんな私が決めて、とにかく発足させたのだが、2年目の本年度には、教員同志が自発的に運営してくれるようになり、1997年10月に開催された第2回の公開講座は、テーマから講師の選定から開催方法まで、いっさいが私の手を離れ、しかも受講希望者が殺到して、かなりお断りしなければならないほどの盛況となった。本当に嬉しいことである。

専門学校長だった時には短期大学設立が重要な役目とされていたのだが、今度は4年制大学への移行が宿題となってしまった。時の移るのはまことに早いのが、やがてこの医療技術短期大学部が京都府立医科大学医療技術学科となって、優秀な人材を次々と輩出することになることを、心から祈っている。

（1997年10月）



外 観

## 伏見分院を振り返って

編纂事業委員長 森 本 武 利

附属病院・伏見分院の71年間の歴史を年表にまとめると、別表のようになる。この過程の主な動きを追ってみると、いずれも大学および本院の建築と伏見分院の整備が天秤に掛けられ、毎回前者が選択されてきたことがみてとれる。昭和30年代はじめには、伏見分院対策委員会が作られ、心臓および血圧に関する研究所に切り替える案が出され、一部は実行に移された。しかし京都府が財政再建団体に指定されるとともに、伏見分院を縮小しても、大学および附属病院を維持する方向へ向かって行った。

1974年（昭和49年）には、伏見分院の敷地に京都府の衛生研究所および公害研究所を建設する案が京都府より提示された。同時に看護学院を荒神橋南詰めの近畿財務局の土地、ないしは久邇荘の北側を購入する案が示されたが、いずれも実現せず、結局大学敷地内河原町よりの敷地に建設する事が決定された。大学の将来計画委員会では、伏見分院の整備計画として、第1期外来部門の整備、第2期神経関係部門の整備、第3期研究部門の整備を決定したが、1977年（昭和52年）の外来部門の整備および1979年（昭和54年）の京都府衛生公害研究所は完成したが、神経内科を中心とした研究所は実現するに至らなかった。しかしこれは同時期に平行して進行した与謝の海病院の改築、大学整備構想、こども病院の建築等の影響を受けたものである。



この間、移植センター構想、さらに1996年（平成8年）には附属脳・血管系老化研究センターとしての使用などが検討されたが、大学での建築事業が平行して進行し、また京都府議会でも絶えず伏見分院の赤字が問題となったことなどから、71年の歴史を閉じることになった。

- 1926年（大正15年）11月 伏見町立病院開設（大倉恒七氏の寄贈による）。  
1929年（昭和4年）4月 伏見市立病院と改称（伏見市市制施行による）。  
1944年（昭和19年）4月 京都府立医科大学附属女子医学専門部附属病院として寄付を受ける。  
1951年（昭和26年）3月 附属女子医学専門部を廃止し、京都府立医科大学附属伏見病院と改称。  
1952年（昭和27年）4月 伏見病院附属乙種看護婦学院を本学附属准看護婦学院に併合。  
1952年（昭和27年）8月 手術室が大倉治一氏の寄付金により竣工。  
1953年（昭和28年）10月 京都府立医科大学附属伏見病院を附属伏見分院に改称。  
1955年（昭和30年）3月 伏見分院長選考規定が制定され、川井銀之助教授が分院長に就任。  
1957年（昭和32年）10月 木口直二外科学助教授が分院長に就任。  
1958年（昭和33年）2月 分院に心臓外科を開設。  
1961年（昭和36年）11月 分院の病舎が救急の10床を残して閉鎖。  
1963年（昭和38年）4月 内科、外科、小児科、耳鼻科、皮膚科、眼科、産婦人科の助手による外来のみに変更。  
1976年（昭和51年）6月 眼科、産婦人科の診療を休止。  
1977年（昭和52年）5月 外来診療棟、改築工事完成。  
1985年（昭和60年）4月 京都府立医科大学附属伏見診療所と改称。  
1997年（平成9年）3月 京都府立医科大学附属伏見診療所を閉鎖。



平成9年3月 閉院前の伏見診療所



## 学友会のあゆみ

元学友会会長 谷 道之  
学友会会長 吉田幸雄

### 京都府立医科大学学友会の歴史

本学学友会の発足と、その後の歴史については、本学80年史ならびに100年史にかなり詳しく述べられているので、基本的な事項以外は重複をさけ、100年史以降の事柄に重きを置いて記載することにする。

#### 1 校友会の発足と学友会への移行

学友会の前身は校友会であるが、京都府医学校校友会は明治29年12月、それ以前からあった「振元会」、「静虎団」、「敷島倶楽部」などの文化、運動団体が大同団結して創設された。校友会は生徒が正会員で、院校職員は名誉会員、卒業生は特別会員、会長は校長であった。会は学術部と運動部に分かれ、前者は「校友会雑誌」を発行し、後者は各種運動部を創設した。明治36年6月、本会は京都府立医学専門校校友会と改称された。

校友会の活動は大正7年からの大学陞格運動によって盛り上がった。母校愛に燃える学生は大正8年4月2日、三条柳馬場青年会館において全国から800余名の卒業生を集めて校友大会を開催し、予科建設用地購入のための募金を建議し、遂に大將軍に6,896坪の土地を購入し之を府に寄付した。その甲斐あって大正10年10月、目出度く陞格が認可された。現在の阪大、慶応大、名大に続いて第4番目の大学陞格であった。之に伴って大正11年4月、校友会を学友会と改称し、学友会規則を制定した。会長は学長、正会員は学生、教員などは特別会員、卒業生は会友であった。「校友会雑誌」は「学友会雑誌」と改題された。また昭和4年9月には会則が改正され、会長の他に理事長職が制定された。

その後、日本は次第に戦時体制へと傾いて昭和16年6月には大学に奉公会が結成され、今まで学生が主体となってきた学友会は大きな変革の時を迎えた。すなわち昭和16年4月の会則改正により、会長は学長の兼務のままであったが、正会員は本学並びにその前身の卒業生、および研究科・選科生とこれらを終えたものとなっており、教員等は特別会員、他学卒業生は賛助会員となっている。学生はその後は学生自治会にまとめられ、学友会の構成メンバーからはずされた。

その後の制度面での大きな変革は、昭和32年6月、学長の学友会会長兼務制が廃止され、専

任会長制となった。また昭和35年4月、財団法人青蓮会の設立が認可され、従来の学友会理事長制は廃止されて学友会会長が青蓮会理事長を兼任することとなった。

## 2 歴代学友会理事長並びに会長

学友会理事長 後藤基幸（昭和4年9月 — 昭和6年6月）

森 益蔵（昭和6年6月 — 昭和17年9月）

後藤五郎（昭和17年9月 — 昭和28年10月）

鈴木成美（昭和28年10月 — 昭和35年4月）

専任学友会会長（兼青蓮会理事長）

古玉太郎（昭和32年6月 — 昭和48年3月）

浜 孝雄（昭和48年4月 — 昭和51年3月）

中村文雄（昭和51年4月 — 昭和57年5月）

谷 道之（昭和57年5月 — 平成6年5月）

吉田幸雄（平成6年5月 — 現在）

## 3 学友会館の沿革

次に学友会館の沿革について述べてみると、昭和8年、会員の集会や宿泊に便利な学友会館の建設の気運が高まり、7年計画で10万円を集め、西構（現在の文化芸術会館の場所）に之を建てる計画を可決し、学生（毎年5円）、卒業生（1円50銭）、教員（1円50銭）、新入生（入学時45円）、大学（毎年500円）から募金を行い、昭和17年にはその額も10万6千円に達したが、戦局の重大化に伴い建設が不可能となった。しかし之に代わるものとして昭和19年6月、荒神橋西詰にあった学士会京都支部会館の土地建物を大学が買収し学友会に貸与した。ちなみに本学80年史によると買収費総額は6万4,900円で、そのうち5万円は学友会、2万円は昭和会の寄付によっている。この土地・建物はその後、昭和32年1月、京都府から学友会に譲渡され、昭和47年の本学創立100周年を記念して学友からの募金により改築され今日に及んでいる。

この100周年記念の学友会館建設に関しては次のような紆余曲折がある。すなわち京都府は6000万円を投じて梨木神社の土地の一部約256坪を買収し、ここに学友からの募金約1億2000万円をもって学友会館を新築するはずであった。ところが神社側はその金で結婚式場などを建てておきながら緑を守る会など住民を扇動して会館建設に反対し、やむなく現有地での改築となったのである。府は記念事業に対してさらに4000万円の事業費を交付してくれた。

## 4 財団法人青蓮会について

財団法人青蓮会は、学友会館の敷地（190坪）と建物（延べ114.4坪）を京都府から無償で学

友会に譲渡を受けた昭和34年より法人組織の設立準備に着手し、昭和35年4月30日文部省より設立の許可を受けたものである。その「寄付行為」の全文を掲載することは省略するが、第2章 目的及び事業の項には、第3条 この法人は、京都府立医科大学（以下「母校」という）の学生、教職員の研修、福利厚生のための施設を経営し、あわせて医学研究の助成促進および学生の育英事業を行い、もって医学知識の向上と文化の発展に寄与することを目的とする（財団法人青蓮会 寄付行為参照）、となっている。爾来、今日まで学友会と共に上記目的に沿う事業を継続している。ちなみにその内容の主なものは、①学生に対する助成（西日本医科学生体育大会、慈恵医大戦、入学式、卒業式、スポーツ傷害保険掛け金、など）②大学に対する助成（教育環境整備、青蓮賞、退職祝賀会、医学講演会など）など、毎年400万円余りの助成を続け、その他トリアス祭、寮歌祭など毎年の行事には学友からの募金が行われている。③社会に対する助成（一般住民を対象とした公開医学講演会定期開催、住民行事に会館の使用など）。

## 5 学友会会則の改正

学友会の会則は、本会の発展にともなって改正をくり返してきたのであるが、最近では昭和58年5月22日制定のものに依っていた。ところが会員の資格について以前から議論のあった箇所について検討を開始し、慎重審議の上改正案を作成し、平成7年の評議員会並びに総会の賛同を得て同年5月28日より施行されることとなった。その主な改正点は、従来、他学出身者は賛助会員とされていたが、入会を希望するものは平等に正会員とすることとした。また従来、講師以上の大学教職員などを特別会員と称してきたが、すべて正会員とすることにした。従って会員は名誉会員と正会員とになる（学友会会則参照）。

## 6 学友会の現在の主な役員組織

会 長	1 名	◇理事の職務分担
副会長	4 名	総務委員会
理 事	50名以上60名以内	会計委員会
監 事	2 名	企画広報委員会
評議員	支部選出82名	学術委員会
	卒業生年度代表61名	会館管理運営委員会
評議員会議長	1 名	会費検討委員会
副議長	2 名	保険等厚生事業委員会
顧 問	若干名	名簿編纂委員会
支部長	24名	役員連絡会

## 7 学友会通信および青蓮会報

従来、学友会通信なる会報が刊行され、会員相互の連絡、親睦を図ると共に大学との連絡、学友会事業の推進に貢献してきたが、創立100周年を迎える昭和45年6月、さらに充実したものを目指して「青蓮会報」第1号が刊行された。年4回定期的に発行され、平成9年8月現在第101号を数える。

## 8 創立100周年事業並びにそれ以降の学友会の主な出来事

本学創立100周年記念事業が開始された昭和42年頃からの学友会の主な出来事を年史的に列挙することにする。

昭和42年9月：本学創立100周年記念事業委員会発足。翌年2月、委員決定：委員長吉村寿人学長（後に丸本 晋学長代行、中村恒男学長、佐野 豊学長）、副委員長は金田 弘附属病院長（後に谷 道之附属病院長代行）、古玉太郎学友会長、企画部長山田 博教授、募金部長中村文雄教授。

昭和45年6月26日：「学友会通信」改題「青蓮会報」第1号発行。

昭和46年1月：創立100周年記念事業募金開始（目標額1億円、1口1万円）。

昭和47年11月3日：本学創立100周年記念式典が記念講堂で、祝宴が鴨川の河原で挙る。

昭和49年11月3日：大学百周年記念会館（青蓮会館）完工式挙る。敷地面積192.3坪、1階55坪、2階・3階51.8坪、建坪延べ158.7坪、場所：荒神橋西詰、建築費：約1億1千8百万円。

昭和50年1月30日：創立100周年記念事業収支精算書公表；収入183,683,229円（内訳：寄付金128,519,499円（目標額1億円）、京都府助成金4,000万円、その他15,163,730円）。支出内訳：会館建設費118,085,340円、百年史刊行費10,297,828円、祝典費8,373,369円、募金活動助成金3,448,000円、事務費3,352,224円、大学施設充実費13,711,000円、青蓮会へ引き継ぎ24,125,876円、その他2,764,363円。

昭和50年6月10日：本学開学の頃の外人教師 Heinrich Botho Scheube の孫 Heinrich Hans-Georg Scheube 夫妻が来学。

昭和51年11月3日：学友会有志の拠金により双稜健児像完成、除幕式挙る。

昭和54年10月7日：市電・バス停留所名は長年「府立病院前」であったが「府立医大病院前」と改称。

昭和54年11月11日：青蓮会20周年記念式典及び祝賀会を京都ホテルで開催。

昭和56年7月25日：大阪で支部長会開催を機に、桜井健二大阪支部長発案により「天神祭船

渡御」鑑賞，これが支部交流コンパ（後に全国学友交流コンパと称す）の第1回となる（大阪支部担当）。

昭和56年12月13日：学友会理事会において，大学創立110周年記念事業を議題とし，検討することを決定。

昭和57年5月16日：評議員会に於いて母校創立110周年記念事業計画案承認（委員長一谷道之学友会会長，副委員長一別府審一・大藪順一・楠 智一学友会副会長，募金目標額1億3千万円，主たる使途—母校に対する教育機器・図書などの寄贈）。

昭和57年7月24日：第2回学友会支部交流コンパ，鴨川床納涼（京都支部担当）。

昭和57年11月13日：京都府立医科大学創立110周年記念式典挙行（於 京都グランドホテル）。

昭和58年6月11日：第3回学友会支部交流コンパ，宮島・江田島体験航海（広島支部担当）。

昭和58年8月31日：募金締め切り，募金応募者数2,135人，募金額91,712,741円。

昭和59年2月24日：京都府知事に寄付目録を贈呈。寄贈品は視聴覚機器，図書館整備，教育用映画作成。

昭和59年6月8日：学友会大阪支部が京都支部から分離独立。

昭和59年7月14日：第4回学友会支部交流コンパ，倉敷 Ivy Square コンパ（岡山支部担当）。

昭和59年12月10日：青蓮会報第50号記念特別号発行。

昭和60年7月13日：第5回全国学友交流コンパ（今回より全国交流コンパと称す）ミシガンナイト（滋賀支部担当）。

昭和60年12月25日：記念碑「嶋村俊一邸跡」除幕式挙行。

昭和61年7月19日：第6回全国学友交流コンパ，於北九州市（九州・沖縄支部担当）。

昭和61年11月3日：京都府立医科大予科記念橘植樹および校歌「遅日の夢」歌碑除幕式挙行。

昭和62年7月25日：第7回全国学友交流コンパ，大阪天神祭・船渡御鑑賞（大阪支部担当）。

平成1年8月27日：京都市長選に本学昭和23年卒の田邊朋之氏が当選。

平成1年9月16日：第8回全国学友交流コンパ，於 熱海市（関東支部担当）。

平成1年11月19日：財団法人「青蓮会」創立30周年記念式典挙行（於 京都ホテル）。

平成2年11月10日：第9回全国学友交流コンパ，於 有馬温泉（兵庫支部担当）。

平成3年3月16日：第1回青蓮賞（学術奨励賞）授与式挙行。以後毎年授与。

平成3年5月25日：三水会（本学名誉教授の会）創立20周年ならびに例会200回記念会開催。

平成3年6月18日：明治38年本学卒の原志免太郎先生（明治15年生まれ，108歳，男性日本一長寿者）逝去。

平成3年9月28日：第10回全国学友交流コンパ，於 京都国際ホテル（京都支部担当）。

平成4年9月12日：第11回全国交流コンパ，於 芦原温泉（福井支部担当）。

平成4年11月1日：本学創立120周年記念式典ならびに講演会開催。

平成5年6月12日：第12回全国学友交流コンパ、於 白浜温泉（和歌山支部担当）。

平成6年1月30日：学歌作者者、伊良子清白先生（明治32年本学卒）の詩碑建立除幕式挙  
行（先生終焉の地、三重県度会郡大宮町）。

平成6年3月31日：本学の学歌、校歌、部歌、その他、思い出の歌のCD作成。

平成6年10月29日：第13回全国学友交流コンパ、於 奈良ホテル（奈良支部担当）。

平成7年1月17日：阪神淡路大地震発生、多くの学友が被災、学友会では直ちに義捐金を募  
集し、787件、983万円が集まり送付。

平成7年10月14日：第14回全国学友交流コンパを熱海で開催予定のところ、群発地震発生の  
ため中止。

平成8年10月19日：第15回全国学友交流コンパ、於 皆生温泉（山陰支部担当）。

平成8年5月26日：評議員会ならびに総会において、本学創立125周年記念事業計画ならびに  
人事案件を満場一致で可決。記念事業の骨子は、①記念式典ならびに祝典  
の開催、②本学125年の歴史的資料の整理ならびに百年史以降の年史編纂、  
③青蓮会館の全面改築。記念事業実行委員長一吉田幸雄学友会会長、同副  
委員長一栗山欣弥学長ならびに桜井健二（後に田中久左衛門）・坂部慶夫  
（後に能勢 修）・山本 稔・井端泰彦学友会副会長、実行委員会委員総数  
267名を指名。

平成8年11月1日：青蓮会報「京都府立医科大学創立125周年記念事業 特集号」を発行し、  
全国学友に募金依頼開始。

平成9年4月30日：青蓮会報第100号を刊行。



## 医学会から京都府医学振興会へ

京都府医学振興会理事 森 本 武 利

### 医学会までの活動

京都府医学振興会の起源は京都府立医科大学研究会にまでさかのぼることが出来る。1921年（大正10年）に7年制の単科医科大学、京都府立医科大学に昇格し、学位授与権が認められた。小川瑳五郎学長は、「日常実施において、或いは研究の傍ら得たる興味ある新知見、経験、或いは新現象等を吐露して、互いに意見を交換」することを目的に、1923年（大正12年）1月24日、学術集談会を発足させた。この発会式には、教員、学生、卒業生等、約500名が参加したことが、本学の80周年史に記されている。その後小川学長は大正15年8月に退職し、兵庫県立神戸病院の院長として赴任したが、この時、本学に奨学資金を寄付した。小川学長を引き継いだ第二代の浅山忠愛学長は、1927年（昭和2年）6月12日、京都府立医科大学学術研究会を組織し、学術集談会の開催、京都府立医科大学雑誌の発行を行ったが、学術集談会および京都府立医科大学雑誌は今日まで継続している。その他この学術研究会は、1938年（昭和13年）には学術研究費補助金を設立している。また1965年（昭和40年）には複写センターを設置し、当時単一の教室で使用出来なかった乾式コピー機によるコピーサービスを手掛け、1971年（昭和46年）からの数年間は年間10万枚を越える利用があった。

昭和42年7月にはこの学術集談会は京都府立医科大学医学会と名前を変更され、学術集談会の開催および京都府立医科大学雑誌の発行を受け継いだ。1971年～1977年（昭和46年～52年）の間、図書館長を務めた間島進教授はコピーサービスの利益を利用者に還元すべく、使用頻度の高い外国雑誌の目次をコピーしたものを各教室に配布する、コンテンツサービスを行った。

京都府立医科大学雑誌の編集は、1974年（昭和54年）に編集委員会が結成され、1980年（昭和55年）の第89巻から表紙に変更を加えると共に、全ての論文が査読審査されることになった。また出版の為の財政基盤が不安定であったので、京都府立医科大学雑誌のみで独立採算性を採り得よう、規約が改正された。その結果、医学会にも経済的な余裕が生じた。

### 京都府医学振興会の発足

1986年3月（昭和61年）には財団法人京都府医学振興会が発足し、京都府立医科大学医学会

の活動がさらに発展することとなった。

財団法人京都府医学振興会の設立趣意書より、設立申請に至るまでの経過を引用すると、以下の通りである。

「昭和42年に、医学の進歩発展を図ることを目的として、京都府立医科大学医学会が設立され、学術雑誌の発行を中心として、活動してきたが、府立医科大学及び附属病院をめぐる社会情勢の変化に加え、近年当該医学会の資産も順次増加し、その組織体制を強化するため法人化の声が強く求められて来た。

一方、京都府立医科大学の出身者で、社会の第一線で活躍されている多くの方々から、京都府の医学、医療の発展及び府立医科大学の教育、研究の振興に役立てたいとの寄付金も多く寄せられ、こうした貴重な資金を財源として運営し、学術研究の奨励、助成を行うことが適当との結論を得た。

そこで京都府立医科大学医学会を発展的に財団法人化すると共に、法制度にのっとった法人として事業の整備を図り、学術研究の奨励、助成を中心事業として、直接的、間接的に地域におけるより高次の医療水準の確保と健全な地域社会の福祉増進に寄与すべく法人の設立に至ったものである。」

ここにある京都府立医科大学の出身者としては、昭和12年卒の松永栄先生からの度重なる寄付がある。松永先生は「大学整備事業の一環として毎年寄付を継続したい」と申し出られた<sup>1)</sup>。これが本学として受け入れる方途が無かったことがある。またこの時期に1900年（明治33年）から10年間、京都府医学校および京都府立医学専門学校の校長を務められた島村俊一先生の未亡人島村こう氏からの寄付の申し出があった。同氏は1963年（昭和38年）におなくなりになったが、その遺言に島村俊一先生邸跡を処分しそれを京都府立医科大学精神科学教室に寄付するようにとの1項があった。これを有効に使うため、精神科学教室から大学への申し出があり、この1億円を島村基金とすることとなった。なおこの法人の発足には、当時の佐野豊学長および草木慶治事務局長（現京都府副知事）の尽力があった。

現在京都府医学振興会は、従来からの学術集談会の開催および京都府立医科大学雑誌の発行のほかに、市民講演会の開催、本学研究者の海外研究費の補助、本学での研究会等への補助、私費留学生への奨学金支給事業、受託研究費および治験費の経理事業等を手掛けている。

また特筆すべきこととして、本会の発足した翌年、1986年（昭和62年）に松本仁介氏（キョート・スポーツ代表）より14,500万円の寄付のお申し出があり、それ以来の10年間に8億円にのぼる寄付を戴いた。この寄付は松本仁介医学振興基金として、「医療の中の人間性を考える会」等の講演会、「人間性に立脚した医学、医療のための研究」への助成などに役立てると共に、脳・血管系老化研究センターの備品購入等に役立てられている。



なお京都府立医科大学雑誌の歴史については、以下の資料<sup>2)</sup>にゆずる。

- 1) 青連会報29：2，1976。
- 2) 森本武利，奥村美都子，上野頼昭：京都府立医科大学雑誌の歩み。  
京都府立医科大学雑誌 100：637-952，1991。



## 三水会より

名誉教授 菅 沼 惇

三水会（名誉教授の会）について或いはご存じのない方もおられるかと思しますので、本会の成り立ちと現状について述べさせていただきます。

三水会10周年記念誌（昭和56年）によれば、後藤五郎先生の話として次のように書かれています。「長年同じ釜の飯を食べた間柄でありながら、大学を退いてしまうと一堂に会する機会もなく、お互いに消息を知らないまゝに過ごすようになることは、余りにも味気なく淋しいことだ。そこで大学を辞めた者がお茶でも飲みながら談笑できる場所を考えて欲しいと大学当局へ申し入れました。これは大学紛争が終った翌年の昭和45年の夏頃でした。年が明けて間もなく当時の丸本学長代行から朗報が寄せられました。それは名誉教授の先生方の会合のために大学側が日時を指定して大学前の府立文化芸術会館の一室を借り受けることにしたいというものでした」。

このようにして三水会の第1回例会は、昭和46年2月17日に府立文化芸術会館で開催され、それ以来毎月1回（第三水曜日に）開催されることになり、平成9年12月現在で、263回を数えております。会場は本学附属図書館が新築されてからは、その中の医学交流センターで開催されています。

毎月の例会では、学長、教授の方々及び事務局長の一人が見えて、大学の現況や各分野のトピックスやご自身の研究などについて有益なお話を聞かせて頂いております。最近、助教授や講師の先生方のフレッシュな、そして有益なお話も聞くことができ、得るところが大きいことを有難く思っております。

お話をして頂く方の交渉は、初めは後藤先生自身がやっておられましたが、昭和51年2月の第51回例会からは、その人選を研究部長にお願いすることになりました。また、三水会の世話役は、10周年を機会に後藤先生から山田博先生に変わりましたが、昭和59年山田先生が急逝されたため、菅沼が変わり、その後永田、吉田(幸)、岩島の各名誉教授が担当しております。また、事務は学長・局長副室の秘書にお世話になっています。

第100回例会（昭和56年1月）は、水越治学長を始め管理職及び名誉教授10余名と共に祝賀会を持ちました。また、三水会20周年・例会200回を記念して、平成3年5月に祝賀会を開き、藤田学長を始め名誉教授20余名が出席しておます。

三水会例会記録としては、10周年記念誌、12周年記念誌（昭和58年）及び三水会20周年・例

会200回記念誌（平成3年）等が発行されています。第201回以降の記録については、目下発行準備中です。



川井銀之助名誉教授のデッサンより 旧附属病院玄関

## 京都府立医科大学創立125周年記念式典 をふりかえって

学友会会長 吉 田 幸 雄  
式典委員長 井 端 泰 彦  
祝典担当理事 中 橋 弥 光

京都府立医科大学創立125周年を記念する式典と祝典が菊花薫る平成9年11月2日、国立京都国際会館に於いて厳肅に、かつ華やかに執り行われました。当日、空は果てしなく澄み渡り、比叡をはじめ周辺の山々は色とりどりに秋の装いを深めておりました。

午後3時、井端泰彦式典委員長によって開会が宣言され、本学オーケストラ部による「ベートーベン交響曲第5番“運命”第4楽章」が演奏され、次いで学歌が高らかに歌い上げられました。続いて栗山欣弥学長の式辞が述べられましたが、この中で学長は本学が幾多の苦難を乗り越えて今日に至った歴史を振り返り、その間に母校を支えた多くの先輩や京都府並びに京都府民に対し感謝の意を述べ、更なる飛躍に向かっての決意を披瀝されました。

次に設置者である荒巻禎一知事の告辞がありましたが、その中で本学が府民の信頼に応えるため府は次々に施設の整備を進めていることを述べ、来るべき150年、200年を展望して、日本のみならず、世界をリードする医学、医療の中核施設として前進するよう希望すると述べられました。さらに引続いて町村信孝文部大臣（代理）、小泉純一郎厚生大臣（代理）、山本直彦京都府議会議長（代理）等、来賓の方々の祝辞があり、また枅本頼兼京都市長、坪井栄孝日本医師会会長、中野竜三京都市会議長、野中広務自民党幹事長代理などからの祝電が披露され、午後4時過ぎ式典は無事終了しました。

しばらく休憩の後、「都の韻」と題する祝演奏が京都邦楽グループの皆さんによって演奏されました。これは尺八の名手である本学昭和32年卒の富井宏先生指揮による奏楽で、京都らしい古式豊かな中にも華やかな音色がメインホールいっぱいに響きわたり、聴衆を魅了しました。

つぎに、近藤元治病院長の司会によりノーベル物理学賞受賞者、江崎玲於奈筑波大学学長の記念講演「一物理学者が歩んだ50年の道」が行われました。江崎先生は京都で育ち、小学校から同志社中学、そして三高へと進み、府立病院にも何度かお世話になったといわれ、人なつっこいお人柄がまず印象的でした。ノーベル賞受賞の対象となったトンネルダイオードの話もありましたが科学者の心構えといったお話、例えば judicial mind（道理をわきまえ物事を分別する能力）も大事だが、creative mind（創造する個性的な能力）が大切であるとか、creative failure（創造的アプローチの失策）が chance を含んでいるとか、ノーベル賞を取るためにはいけない5箇条とか、いろいろユーモアを交えながら示唆に富むお話をして下さいました。

式典が終わり、午後5時40分より、いよいよ「さくらの間」に於いて祝典が始まりました。中橋弥光祝典担当学友会理事の司会により、まず吉田幸雄学友会会長の開会の挨拶を皮切りに、来賓を代表して横田耕三京都府医師会長の祝辞、ご出席予定が急病のため取りやめとなったMr. Dieter Scheube（本学開学の頃の外人教師Dr. Botho Scheubeのお孫さん）からのメッセージが森本武利教授により披露された後、祇園甲部の芸妓衆に倣る「手打ち」が始まりました。

これは今から394年前の慶長8年、京都四条河原で始まったという謂われのあるもので、何でも京の顔見世興行で役者衆の乗り込みを迎えるための手打ち式であったそうで、現今では京都祇園の芸妓連の間でのみ伝え続けられる伝統的な行事の一つとされております。11名の芸妓衆が揃いの黒留袖姿で艶やかに会場入り口から紫壇の拍子木を笛、太鼓、三味の音に合わせて小気味よく打ち鳴らしながら場内を練り歩きつつ登壇、「七福神」、「花づくし」の詞譜に京都府立医科大学創立125周年を祝う詞文を盛り込んで唄う様子は、従来の祝舞いとはまた異なった趣かにして華麗、まことに雅やかなもので、ぎっしり詰まった会場も、暫し、声もなくシーンと静まり返って見入っていました。続いて6人の舞妓さんによる華やかな祝舞「君に扇」が絢爛と披露されて前座を終了いたしました。

次に江崎玲於奈先生始め来賓並びに本学関係の代表者11名による「鏡割り」の儀となり、司会の中橋理事の「Ein, Zwei, Drei」の音頭で一斉に木槌が打ち下ろされました。この祝酒を湛えた杯を高く掲げて谷道之学友会前会長の発声による乾杯が行われ、いよいよ祝宴となりました。全国から馳せ参じてこられた学友をはじめ、近隣各大学学長など本日の来賓各位、名誉教授、教職員、学生、その他関係者総勢850余人が「さくらの間」をうずめ、屋外の床几にもせり出して、大変な盛況でありました。祝宴の時間は瞬く間に過ぎ去って午後8時、山本稔学友会副会長の閉会の辞をもって終了し、別れを惜しみつつ岩倉を後にいたしました。

## 京都府立医科大学創立百二十五周年記念式典・祝典

平成9年11月2日  
国立京都国際会館

### 式典（15：00～17：20）

開式の辞

奏 楽

「ベートーベン交響曲第5番『運命』第4楽章」 京都府立医科大学オーケストラ部

学歌斉唱

学長式辞

京都府知事告辞

来賓祝辞

来賓紹介

祝電披露 みやこ りびき

祝演奏「都の韻」

京都邦楽グループ

記念講演「一物理学者が歩んだ五十年の道」

講師：筑波大学長 江崎玲於奈

閉式の辞

### 祝典（17：30～19：30）

開 式

学友会長挨拶

来賓祝辞

手打・祝舞

開 宴

鏡割り

乾 杯

閉 式

